

映画

宮本百合子

青空文庫

雨傘をさし、爪革のかかった下駄をはいて、小さい本の包みをかかえながら、私は濡れた舗道を歩いていった。夕方七時すぎごろで、その日は朝からの雨であつた。私は、その夜手許におかなければならない本があつたし、かたがたうちにいるのがいやで、外に出て来たのであつた。自分が親切と思つてしたこと、そのことが思つていたような結果としてはあらわれず、自分が自分の親切に甘えたということばかりが思い当るような気持のことがあつて、私はうちにいたくなかつた。そして、雨の外を歩いていった。

いろいろの心持を感じながら歩いていて、或る通りのわきに出たら、その映画館の方で頻りにベルが鳴りつづけている。割引

のしらせである。

思いついて、私は一つの広い改正道路を横切って、銀映座の前へ行った。雨傘をさして外套の襟などを立てた黒い人の列が、そう大して人通りのない横丁のこっちの端までのびている。列のなかには派手なマフラーをした若い女のひともいたりして、傘が傾くと、別に連れもないらしい白い顔がぽつねんと見える。まだ切符は売り出していないのであった。

その時間からは、「女人哀愁」というのとニュースとが見られるわけである。私は特別にその映画を目ざして行っただけではなかったが、観てもいいという心持で、列の最後の方にまわって傘をさしたまま往来に立っていた。

「ちよいと、まだ大丈夫よ！　ホラ、見なさいってば……」

その横丁へどこかの家の裏口が向っていて、そのガラス戸が開き、そこから女の首がのぞき、高い声で姿の見えない誰かに云っている。その女の顔は、うしろから灯かげがさしてアスファルトの上に落ちているから、こっちは見えない。

一番おしまいであつた私の後に、若くもない男が又来て列にいた。人数は疎らだのに、さしている傘ばかりが重なり合うように、猶暫く立っていたら、その横丁へ自動車が入って来て、おとなしい人の列を道路に沿ってたてに押しつけてしまった。

私は、一人でそんな風にして偶然映画を観ることがよくあるが、その気分は気のあつた友達とつれ立ったりして観る時とまるきり

違つて面白いものがある。

何年も前モスクワに暮していた時分には、よく夜ひとりで近所の映画を観た。部屋に友達を一人で置いてやるためには外へ出なければならなかった。あつちは一時間半ぐらいで循環する。私のよく行つたところは小さい映画館だもので、下の食糧品店は夜になるとすっかり暗く閉まっている。わきの方にチラチラとイルミネーションのついた看板が淋しく一二枚出ている狭い入口があつて、そこから階段をあがって行くと、二階が映画館になっているのであつた。

冬だと、誰でも靴の上にもう一つ重ねてフェルトの厚ぼったい防寒靴をはいて外を歩くのだが、ところによると映画館でもそれ

を脱がなければならぬところがある。そして、下足に預ける。皆がそれをやるからひどい混雑でいやな思いもする。近所のその映画館は小さくて、きたないかわり、防寒靴をはいたままでよかった。それがたいへんに気易い。切符を買って、入るとそこが広間の待合室で、真中に緑色の縮緬紙の大きな蝶結びをつけた埃っぽい棕櫚の鉢植が一つ飾ってあって、壁に沿って椅子が並べてある。

どんなすいた晩でも、そこでは七八人の楽師が待っている人のために音楽を奏していた。或る晩、それらの楽師たちが第九シムフォニーをやっていた。全く意気込んで、そこにきいている人たちの理解にかかわらず、今晚はこれをやるんだという意気込みか

たでやっている。私は仔熊のような防寒靴をはいたまま、外套も着たまま腰かけてそれを聴いていて、好意を感じた。鼠色のフラインネルの襯衣シャツを着たりして、手の赤い楽師たちのその熱心さのなかには、人類の芸術の宝をもう一度本当に自分たちのものとして持ち直そうとしている、その土地全体の気風の若々しさが映って感じられたのであった。

外国のひとたちは旅行して汽車にのつても、停車場へ止ったときは降りて、プラットフォームを散歩する。そういう活動的な習慣はこのごろ若い人々の間に移って来て、旅の楽しさ、旅の間に動いている人間らしい目付の澆刺とした輝きが快く目にとまるようになった。そんな、けちな街の映画館でさえ、人々が少し溜る

と、誰からとなく広間の中に列をつくつてぐるりと歩きはじめるのがしきたりであつた。連れのあるひとは連れと並んで、若い男は女のひとの腕などをとつて、何か自分たちの間で喋りながら、ゆつくりした足どりでぐるぐる広間の中をまわつて歩く。つれがなくて一人でいても、それを眺めるか、さもなければいつしか自分もその列のなかにはいりこんで、それぞれ思っていることは別なのだけでも、自分が外国人なのも忘れ、大勢の中に一人いる独特の心安さ、休息のようなものを感じながら、時間がすごせるのであつた。

銀映座の割引の切符を小さい窓口で買い、釣銭をうけとりながら、私はまざまざと馴染なじみふかかったその町の穢い映画館で過した

いくつかの夜のことを思い出した。

ある年のある日の午後、本郷座をひとりで観ていて、私はなんだか胸が燃えるような思いになって、途中で外へ出てしまったことがある。

それは、アメリカの映画で、女が無実の罪で監獄に入れられ、愛する男と金網越しに会わされる。ぴつたりと女が自分の掌を金網にあて、男も自分の手のひらをそこへ合わせ、互いに求める心とあたたかみとをつたえ合おうとする情景であつた。私には見ていられない苦しいものがあつた。

その晩は銀映座で、本の包を膝の上に置きながら、私は、目を瞠つて、ロンドンの水晶宮焰上の光景を観た。

数年前の夏の夜、その水晶宮に花火祭があつて、私は小さい妹をつれて、それを見物した。そのガラスづくりの巨大な建物が、銀幕の上で燃えとけて行く。やがて鉄骨だけの姿になった廃墟がうつし出されても、思い出は何と不思議だろう。その有様と私の心にある夏の夜のクリスタル・パレスの景色とは合わさつて一つのものとなろうとしないのであつた。

〔一九三七年四月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七卷」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「若草」

1937（昭和12）年4月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

映画

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>